

社会科学分野におけるコミュニティ研究の概観 —臨床心理学的コミュニティ・アセスメントへの接続—

An Overview of Community Research in the Social Sciences:
A Connection to Clinical Psychological Community Assessment

板東 充彦
跡見学園女子大学

Michihiko Bando
Atomi University

飯嶋 秀治
九州大学

Shuji Iijima
Kyushu University

高橋 紀子
福島大学

Noriko Takahashi
Fukushima University

要 約

本研究は、社会学分野を中心に蓄積されてきたコミュニティ研究の概観を通して、臨床心理学的コミュニティ・アセスメントの視点を得ることを目的とした。Delanty(2003/2006)・伊藤ら(2017)を参照し、筆者らの合議により、(1)コミュニティとアソシエーション、(2)コミュニティアリズム、(3)ネットワーク論と社会関係資本、(4)コミュニケーション・コミュニティ、(5)コムタス、(6)福祉コミュニティ論、(7)実践コミュニティ、(8)生活環境主義の8概念を選定した。これらの文献整理を踏まえて、臨床心理学的コミュニティ支援への活用を図るための要点として下記5点を提示した。(1)生活基盤としてのコミュニティと目的志向のアソシエーションとの並存と、これらの生活者への影響を捉える。(2)コミュニティに存在する“共通のもの”(≒共通善)を認識する。(3)言語的コミュニケーションの外部にある、貨幣や権力が統制する“システム”の存在を認識する。(4)生き物としてのコミュニティの動的側面と創造性を捉える。(5)コミュニティ成員の対等性という視点を得る。

【Key Words】コミュニティ、アセスメント、社会学、文化人類学、臨床心理学

I 問題と目的

臨床心理的地域援助は、1988年に発足した臨床心理士資格制度において4大業務の1つとして設定された。2017年には国家資格として公認心理師制度が制定され、地域支援・他職種連携・訪問支援等の推進が明示された。個人カウンセリングを基礎技術としてもつ心理専門職にとって、コミュニティへの関わり及び社会貢献の必要性がますます高まってきている状況である。

しかし、心理専門職の養成課程において、地域援助技法の教育機会は十分にあるとは言い難い。1965年に誕生したとされるコミュニティ心理学は、エンパワメント・生態学的視座・予防等の有効な概念を心理専門家に提示してくれるが、複雑な成り立ちをもつコミュニティをアセスメントする準拠枠を提示するには足りない。コミュニティを捉えるための研究は、社会学分野を中心に展開されてきた。その系譜は次節に譲るが、心理専門家がこれらを学ぶ機会は

ほぼない。

心理学領域から社会学領域への接近は近年模索されており、「対象への接近を通じた理解を重視する」「当事者の視点に立った実践の方向性を示す」という2つの立場が指摘されている(藤澤, 2000)。また, 臨床社会学という新しい学問分野では, たとえば精神分析的集団精神療法, エンカウンター・グループ, 治療共同体, セルフヘルプ・グループ等の社会学的説明が試みられている(野口, 2005)。ただし, 臨床社会学を通じても, 連綿としてあるコミュニティ研究と心理臨床をつなぐ線は描けない。

コミュニティは捉えがたい概念であり, その研究も実践も困難である。社会学者のジョージ・ヒラリーは94個のコミュニティの定義を検討し, ①空間的範囲, ②社会的相互作用, ③共通の絆の3つを最大公約数として抽出した(Hillery, 1955)。ここにコミュニティの規模や種類についての言及はないが, 本研究ではヒラリーが整理したコミュニティ理解を念頭に, 社会学分野を中心に蓄積されてきたコミュニティ研究を概観する。この作業を通じて臨床心理学的コミュニティ・アセスメントの視点を得ることを本研究の目的とする。

適切なアセスメントを通じた支援を旨とする心理臨床家にとって, 茫漠としたコミュニティに対して徒手空拳に関わるのは有効な手段とは言い難い。コミュニティ研究の蓄積が一定の準拠枠を提示してくれるであろうし, 社会学等諸分野の専門家との共通言語をもつことで, 実践的な連携・協働の足がかりを得ることができるであろう。

II コミュニティ研究の系譜

イギリス社会学のジェラード・デランティによる『コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容—』(Delanty, 2003/2006)の整理をもとに, およそ2000年までのコミュニティ研究の系譜を辿る。個人とその環境世界の間には存在するものは, 国家・都市国家・社会・共同体・家政・結社等の概念で論じられてきた。その起源は, アリストテレス, キリスト教諸家, ルソー, カント, ヘーゲル, マルクスの研究者に遡ることができるが, 現在のコミュニティ研究に至る主要概念は19世紀に現れ, 20世紀に開花したと言えそうである。

その起点の一つは, ドイツの社会学者フェルディナント・テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(Tönnies, 1887/1975)である。本書の英語題目は“Community and Society”であり, 前者を「現実的で有機的な生活」, 後者を「想像上の機械的な構造」と捉えた。その後のこれらの概念を巡って議論が展開されていくが, 一般的には, 伝統の中にあるコミュニティとそれを脱したソサイエティという形で受け止められた。そして, この概念は「地方」対「都市」, 「伝統」対「近代」等と換言された。

しかし, この見方は社会学者の共通理解ではない。フランスの社会学者エミール・デュルケムはこの発想を逆転させ, 近代社会における市民的な統合形態こそが「有機的連帯」を可能にさせ, ここに道徳的力としてのコミュニティを見出した。ドイツの社会学者であるマックス・ウェーバーは, 伝統と脱伝統の双方の可能性に開かれたもの

としてコミュニティを捉えた。また、同じくドイツの社会学者レネ・ケーリッヒは、あらゆる社会の強さの主要な源泉としてコミュニティを捉え、新たにも出現するものと考えた(Delanty, 2003/2006)。

アメリカの文化人類学者ヴィクター・ターナーは、これらとは別の視点を提供した(Turner, 1969/2020)。アフリカの儀礼からアメリカの学生運動までを視野に収め、ラテン語から提示した「コムニタス」概念である。ターナーは、社会における構造化・規範化・制度化された側面と対立する、一時的な社会関係としてコムニタスを捉えた。伝統部族の儀礼場面を一つの典型として、コムニタスは構造の境界に現れ、社会集団の成員間に強力な絆を生み出す。この見方から、コミュニティに含まれる象徴的性格を指摘した。イギリスの社会人類学者アンソニー・コーエンは、同じ儀礼の参加者たちも意味の見出し方は一様ではないことを指摘し、ターナーの議論を補った(Delanty, 2003/2006)。

Ⅲ コミュニティ研究の諸概念

以上を踏まえて、次にコミュニティ研究の概念整理を行い、臨床心理学的コミュニティ・アセスメントの視点を得る手がかりとしたい。

その手順として、デランティ(Delanty, 2003/2006)がまとめた系譜に加え、『コミュニティ事典』(伊藤ら, 2017)を参照して我が国固有のコミュニティ研究を整理した。筆者らはこれらを精読し、「アソシエーションとコミュニティ」「コムニタリアニズム」「ネットワーク論と社会関係資本」「コミュニケーション・コミュニティ」「コ

ムニタス」の概念を抽出した。精査の過程において、社会学と社会福祉学の接点である「福祉コミュニティ論」を知り、取り上げることにした。また、共生社会学と文化人類学の立場からコミュニティ研究を行っている筆者の1人(飯嶋)から、上記の文献に収められていないものとして「生活環境主義」「実践コミュニティ」の概念が紹介された。

筆者ら3人は合議を行い、以上の8概念の整理が臨床心理学的コミュニティ・アセスメントに資することを確認した。以下、選定した8概念を整理し、コミュニティ臨床の視点から考察を加える。

1. コミュニティとアソシエーション

一般的には、生来的に存在するものを「コミュニティ」、目的志向で形成されるものを「アソシエーション」と捉えられる。まず、テンニースは「ゲマインシャフトは持続的な真実の共同生活であり、ゲゼルシャフトは一時的な外見上の共同生活にすぎない」(Tonnies, 1887/1975)と述べ、ゲマインシャフト(コミュニティ)を賛美した。これに対してデュルケムは、ゲゼルシャフト(アソシエーション)の概念に、現代社会における「有機的連帯」を捉えて価値観の逆転を図った。これらについて論じながら、マッキーヴァーは大著『コミュニティ』の中で次のように述べ、デュルケムを支持した。すなわち、機械的なやり方で一つの忠誠を尽くす義務を負っていた原始人に対し、文明社会ははるかに有機的であり、その社会的関係は網の目のように形成されている、という(MacIver, 1917/1975)。

さらに、マッキーヴァーによれば両者を

次のように捉えることができる。コミュニティは社会における共同生活の焦点であるが、アソシエーションは共同関心のもとに設立された組織体である(傍点筆者)。コミュニティが統合的であるのに対し、アソシエーションは部分的である。そして、コミュニティはアソシエーションに先行して存在するものであるから、広い領域をもつ国家もアソシエーションとして捉えられる(MacIver, 1917/1975)。

この2つの概念をもとに、その捉え方をめぐって様々に議論は展開されている。たとえば、リトルは、「特定の理由や目的から成員になっているアソシエーションと、非道具的理由または全く特定の理由もなく集まるコミュニティ」と区別している。コミュニティによる集合を、選択あるいは出生によってそれに帰属する場合や、友情・ボランティアリズム及びケアなどの徳性によるものとして捉えたのである(Little, 2002/2010)。またコーエンは、村と都市の対比として捉えられやすい両者について、どの時代の社会にも見られる二側面であると主張した(Cohen, 1985/2005)。なお、アメリカ合衆国では先行して存在した宗教的アソシエーション(教団)によってコミュニティが構築されたという歴史認識をもとに、現代社会におけるボランティア・アソシエーション論が展開され、個人主義とコミュニティの両立が論じられている(佐藤, 2002a, 2002b)。

さて、以上の議論を踏まえ、コミュニティ臨床の現場を振り返ってみる。心理臨床家がコミュニティ支援を行う場合、その対象は病院や学校等の組織であることが多いが、社会学の知見に照らすと、これらは

アソシエーションである。そして、これらアソシエーションとは別の層として、対象者の日常生活に根差したコミュニティが存在している。テニースが指摘したような、生得的で非道具的で、互いに忠誠を示すコミュニティの力は衰退する傾向にあると言われるが、消滅したわけではない。生活者にとっても支援者にとっても意識の外に置かれやすいコミュニティの存在を的確に捉える必要性をこの議論から確認できよう。そして当然ながら、コミュニティ臨床家が、アソシエーションではなくコミュニティに直接介入することもある。この両者に対するアセスメントと介入の技法は異なることも予測し、十分に留意すべきであろう。

2. コミュニタリアニズム

現代のコミュニタリアニズムは、1971年のジョン・ロールズ『正義論』に呼応する形で誕生した政治思想である。ロールズは、社会における優先的な価値を検討するにあたり、各人が自由と平等を獲得する前提となる「正／権利(right)」に重きを置いた。それに対して、コミュニタリアニズムの論客たちは、コミュニティの関係性の中に埋め込まれた「善(good)」に重きを置いて、人間は社会的存在であることを強調した。ロールズが提示した人間観は、あたかも「個」が文脈から遊離して存在しているように見え、コミュニタリアニズムはこれを「負荷なき自我」として批判したのである(糸林, 2010; 宇野, 2013)。

コミュニタリアニズムの代表的な論客は、マッキンタイア、テイラー、ウォルツァー、サンデルらである。主張には差があ

るが、共通点として下記を指摘できる。すなわち、哲学的には、原子論的人間観を批判して人間存在の共同性を強調する点である。政治的には、政治社会の価値中立性を否定して、共通の目的や意味をもった政治的コミュニティを重視することである(菊池, 2003)。ロールズらリベラリズムとの論争を通して、道徳や伝統、社会的文脈の重要性、自己の社会性の意味、共同体の価値などに関する検討が進められていった(伊藤ら, 2017)。

コミュニタリアニズムの重要概念の一つは、コミュニティの成員が共有する普遍的価値のことを示す「共通善」である。そもそも、コミュニティの語源は「共通のもの」であり、コミュニタリアニズムはここに着目したのである。この共通善は、倉阪(2008)によれば、「社会的共通資本の持続可能性が『共通善』のコアをなす」とされる。社会的共通資本とは、自然環境、社会的インフラストラクチャー、制度資本(教育、医療、司法、金融等)等、当該コミュニティの成員たちが共有する装置のことである(宇沢, 2000)。従って共通善は、公共の福祉とほぼ同義と捉えられる。ここから、コミュニティの成員は複数の社会的資源を共有しており、地域コミュニティではこの社会的共通資本の重なりがもっとも濃くなるためにコミュニティ感覚が生じやすくなる、という論理的帰結が導き出される(倉阪, 2008)。

さて、心理臨床の現場には、対象者は原則的に自由意志をもっており、それを基盤とした適切な行動の選択が可能だという前提があると言えよう。もちろん、対象者に影響を与える環境要因の存在を考慮に入れ

て私たちは心理臨床実践を行うが、伝統的な二者関係から構築された理論では、その影響を対象化して自由意志を行使できることが想定されている。

しかし、生活基盤としてのコミュニティを視野に入れ、そこに対象者のみならず支援者も含めて捉えると、私たちに「共通のもの」を基点にして行動の選択がなされていることが分かる。私たちの生がコミュニティに端を発し、「個人はただ個人としては存在できない」というコミュニタリアニズムの主張を認めるなら、そこに縛られながら生活している自分たちの姿が見える。私たちは、過去より大小様々なコミュニティの規定を受けながら行動の選択を行っているのである。ここから自由になることはできないが、この視点を得ることで初めて、「共通のもの」に縛られながらも自己対象化する道が開かれるであろう。

3. ネットワーク論と社会関係資本

コミュニティは、地理的空間としての「地域性」の他に、関係や所属としての「連帯性(あるいは共同性)」の側面から捉えることができる。ネットワーク論と社会関係資本は、後者に着目したコミュニティ論である。ネットワークは、複数の点(個人)をいくつかの線(関係性)で結んだパターンとして捉えられるため、関係の多重性・交際相手の数・ネットワークの密度等を数量的に把握できるようになる(松本, 2014)。

ウェルマンは、都市化・産業化の進展がコミュニティの連帯を衰退させたとする「コミュニティ喪失論」、それにも関わらず伝統的な第一次の紐帯(親密な集団)は維持・機能しているとする「コミュニティ存

続論」に対して、「コミュニティ解放論」を唱えた。すなわち、第一次的紐帯は「まばらに編まれ、空間的に分散し、枝分かれした構造をもつようになっている」ことを主張し、コミュニティは地域の束縛から離れて自由になることができた、と言う(Wellman, 1979/2006)。また、同じ頃に、フィッシャーはコミュニティの「下位文化理論」を唱え、都市周辺における人口量の増大が多様なネットワークをもたらし、新たな文化が形成される様を指摘した。両者の理論は、ネットワーク論の視点から都市化に伴うコミュニティの変容を論じ、自発的紐帯の隆盛と紐帯の断片化を捉えたものである(赤松, 2011)。

しかし、都市において新たなネットワークを築こうとする個人の条件は同質ではない。既婚女性・母親・高齢者・社会経済的地位の低い者等のグループは場所に根差したコミュニティを形成しがちであり、男性・若者・社会経済的地位の高い者等グループは場所を超えたコミュニティを形成しがちである(松本, 1995, 2002)。ネットワーク論においても個人は自由ではなく、都市の規模による他者への接近可能性の大小、及び社会構造による制約が存在する。

パットナムは、社会的なつながりから生じる互酬性と信頼性の存在を捉え、社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)の概念を提示した。また、同一集団内の効用のみを高める結束型(あるいは排他型)と、異なる集団間で効用を高め合う橋渡し型(あるいは包含型)の区別を示した(Putnam, 2000/2006)。これらはパラドキシカルな関係にあり、橋渡しが広がれば結束が崩れる可能

性が増し、結束が崩れれば橋渡しをする価値は薄れてしまうとされる(三隅, 2013)。

心理臨床の現場においても、ソーシャル・ネットワークを活用したアセスメントと介入の技法が提唱されている(田嶋, 2009等)。視覚的にも提示しやすく、当概念と心理臨床の親和性は高いと思われる。しかし、上記の研究蓄積により、ネットワークの自由度には社会的に規定される個人差があり、その形成に及ぼす要因は対象者のパーソナリティや能力に限定されないことが分かる。従って、個人の社会的支援ネットワークを捉える際には、社会的変数の把握もアセスメントする必要がある。

また、社会関係資本の結束型と橋渡し型の概念からは、対象者が所属するコミュニティが進む方向性を捉える視点を得られる。複数のコミュニティ間の相違に加え、コミュニティとその成員の間にある方向性の差異が葛藤を生む様子を捉えることができる。

4. コミュニケーション・コミュニティ

ハーバーマスの公共圏とコミュニケーション行為の理論を受けて「コミュニケーション・コミュニティ」の概念を示したのはデランティである。従来コミュニティ概念に対して、「異議申し立て」を持続的に行う関係性に着目し、コミュニケーションを媒介にコミュニティを捉える視点を提示したのである(Delanty, 2003/2006)。

ハーバーマスは、貨幣や権力によって統制される領域(経済や行政)を「システム」と呼んだ。これに対して、言語的コミュニケーションにより調整される領域を「生活世界」とし、社会関係を捉える層を捉え直

した。生活世界の主な場面は、公共的論議が行われる場・学校・家庭などである。システムと生活世界は互いに独立・分化しているが、生活世界で展開されるコミュニケーションがシステムに影響を与えうるし、その逆の影響もある(Habermas, 1981/1987; 中岡, 2003)。

ハーバーマスは、このような絶え間ない言語的コミュニケーションが展開される場を「公共圏」という用語で呼んだ。公共圏は、システムからの規制を排除するため、国家とは異なる。また、参加者たちの共通の関心事(共通善)を話題にするため、私的空間とも異なる。愛でつながる私的空間である「親密圏」も時に暴力的で、自由な言動が封じられる場合があるために、国家と私的空間の間にコミュニケーション・コミュニティとしての公共圏の出現を願ったのである。

ハーバーマスによれば、公共圏の成立には以下4つの前提が存在する。1) 本来は社会的地位の差異がある対話者が、あたかも平等であるかのように協議する。2) 単一の公共圏が形成されることが望ましい。3) 共通善をめぐる協議に限定される。4) 国家と明確に分離することで、民主主義的な公共圏を機能させる。しかし、フレイザーはこれら4点に対して疑問を提示し、さらに議論を深めている。すなわち、すでに「私的」と「公的」の線引きや共通善の選定に支配-従属関係が含まれていることや、議会等の「強い公共性」とは異なる、世論を構成する「弱い公共性」の重要性等である(Fraser, 1992/1999)。

私たち心理臨床家は、言語的・非言語的コミュニケーションにより対象者に関わ

る。コミュニケーションはここで完結しているように錯覚してはいないだろうか。ハーバーマスが「システム」と呼んだ貨幣や権力等を媒介とした関係性は、面接室よりもコミュニティに色濃く現れるであろう。時に、言語的・非言語的コミュニケーションが無力になるくらい、システムが支配的になる関係性もあろう。心理臨床は、それらのシステムに対して直接介入することができるのだろうか。あるいは、システムと生活世界とを結ぶ領域に介入することができるのだろうか。ハーバーマスが精緻な議論により死守しようとした公共圏に対し、その外部に存在する別種の力を捉える視点をもたないと、これらの検討課題に取り組むこともできないであろう。

5. コムニタス

文化人類学者のファン・ヘネップは、世界各地の通過儀礼を考察し、出生・成人・結婚・死など、年齢や社会的地位等の変化に伴う境界性を論じた(Van Gennep, 1960/2012)。ターナーは、この通過儀礼論を受けて、この過渡的な状況で生成する特異な共同体を「コムニタス」と命名した。コムニタスは、社会で支配的な「構造」に對置されるところの「反構造」である。コムニタスでは、社会構造における優位者は役割の重荷から解放され、劣位者は一時的に権力を手にすることもできる。曖昧で未分化な関係性による均質な仲間集団が形成され、一面ではカオスであるが、他面ではユートピアの性質を有する(Turner, 1969/2020)。

コムニタス論の構想の一端は、マルティン・ブーバーの「我と汝」概念にある。ブー

バーは、私と相手の関係性そのものを「われ-なんじ」関係と呼び、容易に道具と化す社会構造から離れた、他者と共にある純然たる場を本質的なコミュニティと捉えたのである(Buber, 1923/1979)。

ターナーによれば、コムニタスには次の3つの様式がある。1) たとえばヒッピー文化のように、社会のニーズを捉えて出現する「実存的(自然発生的)コムニタス」。2) 教会のように、実存的コムニタスが社会の中で組織化された「規範的コムニタス」。3) コムニタスの青写真を提供する、ユートピア的モデルとしての「イデオロギ的コムニタス」。このうち2) 3) はすでに構造の内側にあるため、反構造としてのコムニタス1) は構造化されていくプロセスを含むものとして捉えられる(Turner, 1969/2020)。

河合隼雄は、心理臨床の場は、イニシエーション儀式がなくなった現代社会にけるコムニタス空間であると述べた(河合, 1989)。また、文化人類学者の山口昌男は、本来は「劇場」としてのコムニタス空間であるべき学校が、現在では規範に縛られてそれとはかけ離れた場になっていると述べた(山口, 1988)。また、セルフヘルプ・グループやエンカウンター・グループ等は、ヒッピー文化と同種の反構造的コミュニティが形成される場となる。このように、心理臨床の場とコムニタス論には親和性があるが、反構造としてのコムニタスが容易に構造に転化する変性を十分に認識しておく必要がある。生活人として存在する私たちは、反構造の場に留まり続けることは容易ではないのである。

構造で覆われているように見える現代社

会において、その隙間にコムニタスは確実に存在し、瞬間的に現れては消えている。コムニタスの概念自体はユートピア的であるが、コムニタスが瞬間的に生成-消滅する社会は現実的なものである。従来の地域コミュニティとは異なるものだが、たとえばセルフヘルプ・グループ等をコミュニティとして捉えることに違和感はない。社会制度上は明確な目的志向をもつ心理臨床の場にコムニタスを捉えることで、新たな視点を得ることができるだろう。

6. 福祉コミュニティ論

奥田道大は、都市社会学の立場からコミュニティ・モデルを提示した(図1)。A「地域共同体」は伝統的なもので、地縁的結びつきと一体感情に裏づけられた共同体である。B「伝統的アノミー」は、時代の経過により地域共同体が解体したけれども代替モデルが見いだせない状況を指し、無関心派が多数を占める都市が典型である。C「個我」は、地域共同体の「住民意識」に対置して、「市民意識」から形成される集団である。D「コミュニティ」は、集まった住人らが自主的に「まちづくり」を行い、新たなコミュニティを形成する。ここにおいて、コミュニティは開かれ、作られる(奥田, 1993)。

この奥田のコミュニティ・モデルに依拠して、福祉学の視点からコミュニティ論を展開したのが岡村重夫である。岡村は、生活の場としてのD「コミュニティ」の基盤の上に、「福祉コミュニティ」が形成されるとし、これを「二本立てのコミュニティ論」と呼んだ。社会学のコミュニティ概念に対し、福祉学のコミュニティは「一人称

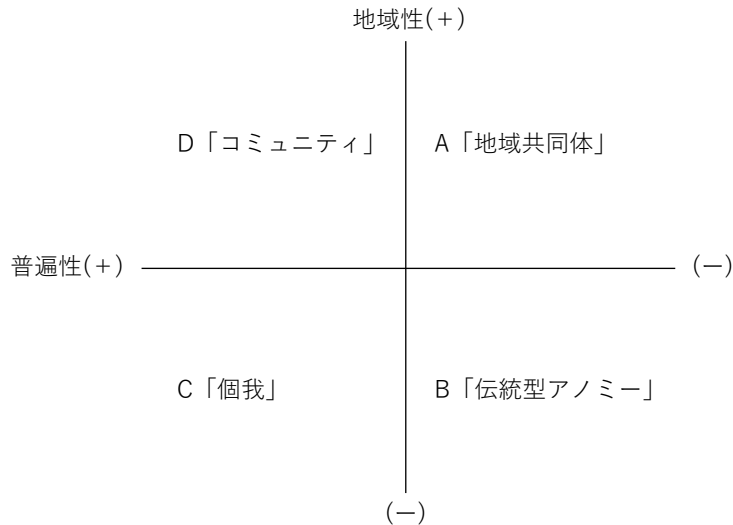


図1. 奥田道大のコミュニティ・モデル

のコミュニティ」であり、具体的な対象者の名前で示すことができる。対象者を中心に、「共通の福祉関心」をもつ人々・支援者・機関等から成り立っている(平川, 2008, 2016)。

このような福祉コミュニティの成立のために、A～Cの状態からDを目指す必要があると岡村は述べ、この福祉実践を「一般的地域組織化活動」と定義した。しかし、福祉が対象とする少数者は非力であり、地域住民のマジョリティが形成していくコミュニティに参加することが難しい。そこで、少数者の言説を代弁する福祉コミュニティが必要となるが、これを形成する福祉実践を「福祉組織化活動」と定義した(岡村, 2009)。

以上のような、支援対象者を中心に置いた岡村の福祉コミュニティ論は、心理臨床家にとってもなじみやすい。ここでの要点は、社会学のコミュニティ論を土台として、生活の場としての地域コミュニティと対象者を中心とした福祉コミュニティの二

層を分類して捉え、それぞれに対する介入技法の理論化を進めていることである。臨床心理学的コミュニティ支援では、学校や病院等の組織への介入と、地域コミュニティ自体への介入の違いや連動について十分な議論がなされているとは言い難い。福祉コミュニティ論から、予防的支援として地域コミュニティに介入する視点、対象者にまつわる共通の問題関心を醸成する視点を学ぶことができよう。

7. 実践コミュニティ

これまでの議論でも、コミュニティは静的に存在するだけではなく、動的に形成されていくという側面が指摘されてきた。このうちの後者に着目したのが、人類学や教育学で注目されている実践コミュニティ(Community of practice)の議論である。この背景に、ボランティアな風土のもとで自らコミュニティを形成するアメリカの文化を指摘できよう。

アメリカの社会人類学者ジーン・レイヴ

と教育実践家エティエンヌ・ヴェンガーは、徒弟制のモデルから「正統的周辺参加」という概念を提示した。全ての参加は「正統的」なものであり、非正統的参加は存在しない。また、全ての参加は「周辺の参加」であり、中心的参加というものはない。周辺とは積極的な概念であり、中心や完全ではなく「十全たる参加」へ向かう(Lave & Wenger, 1991/1993)。親方に対する徒弟、大人に対する子どものように、その全てがコミュニティに組み込まれ、学習が進むのである。

この議論は、演劇や音楽等の芸能を学び継承する共同体の理解へと発展し(福島, 1995)、また企業実践の理論化にも寄与している。両者に共通しているのは、「もっとも有益な知識ベースはコミュニティに組み込まれている」という理解である(Wenger, McDermott & Snyder, 2002/2002)。個人ではなく集団で所有される「共通のもの」として知識を捉え、コミュニティの成員たちが様々に参与しながらそれを創造・継承していくのである。

さて、心理臨床場面では、次のような「知識」の存在を指摘できよう。精神疾患に関する知識、社会的な問題性の所在、具体的な対処の工夫、暗黙に埋め込まれた共生の作法、順位づけられた価値観…。ここには様々なものを配置できるであろうが、これらをコミュニティが生成するものと捉えてみる。実践コミュニティの考え方からは、仮にその実践を主導する立場の者がいたとしても、コミュニティの成員たちはその作業に共に参画するのである。

さらに、グローバル化した社会において無数のコミュニティが生滅し、かつ私たち

が同時に複数のコミュニティに参加するという複雑な現状を想起してみる。実践コミュニティの理論は、コミュニティをめぐるこの複雑な現状に対して、シンプルな視点と有効な関わり方を提示してくれるように見えるのである。

8. 生活環境主義

環境社会学者の鳥越皓之らは、琵琶湖湖畔の村落共同体が高度経済成長期に直面した開発への対応研究を通して「生活環境主義」を提示した(鳥越・嘉田, 1984)。観光開発を志向する「近代技術主義」でもなく、自然保護を訴える「自然環境主義」でもない、人が環境とつき合う中で選択する生活者としての言動を重視する立場である。

生活環境主義の背景にあるのは、生活単位としてのイエと、それらの互助からなるムラを捉えた有賀喜左衛門の理論である。そこに暮らす人々は、小さなコミュニティに埋め込まれながら、その外部から押し寄せるインパクトに対応していかなければならない。そこで創造性が発揮され、言説(言い分)が構成されていくが、これは住民が生きていくための便宜的言葉であり、“生活知”である。ここには必ずしも首尾一貫性は存在せず、時に“豹変”するよう見え、コミュニティの文脈から切り離されているとも捉えられる。鳥越らは、社会学者として個人の心を捉える限界を提示しながらも、社会調査の蓄積から「人の心は分からないが人々の心は分かる」というテーゼを提示するに至ったのである(足立, 2018; 松田, 1989)。

このようにコミュニティの言説を捉えたうえで、学者としての事象の研究論文化と

コミュニティへの還元も関与の方法論として模索された。地域コミュニティは、論文化された主張も自らの言説に取り込んで再構成していくことが可能となるからである。コミュニティの外部からも当該コミュニティの生態に関与する方法論を提示したのであり、この延長線上に環境社会学者から政治家となった嘉田由紀子氏(元滋賀県知事・現参議院議員)の存在を位置づけられる。

以上のような、丁寧なフィールドワークと現場との格闘から得られた知見を私たちは十分に踏まえるべきであろう。伝統的に臨床心理学は個人の心を対象とし、しばしば一貫性に欠けるその振る舞いの意味を捉えるよう理論構築を行ってきた。生活環境主義では、生活者の視点に立って地域住民たちの葛藤への対処・生き延びるための方略・その一貫性のなさ等を捉え、誠実な関与を模索した。コミュニティに関わる心理臨床家から、このような地域住民の強い葛藤はまだ十分に提示されていないように思われる。それは、コミュニティへの関与の希薄さか、捉えがたい事象からの回避かもしれない。私たちは、心理臨床の目的に照らして、コミュニティの捉えがたさに関わり、生活者及びコミュニティを支援する有効な理論と方法を模索する必要がある。

IV まとめ—臨床心理学的コミュニティ支援への活用—

大村(2000)・野口(2005)等の社会学から臨床心理学への接近がある一方で、臨床心理学から社会科学分野のコミュニティ研究への接近はこれまでに見られなかった。本研究の目的は、社会学や文化人類学の知見

から臨床心理学的コミュニティ・アセスメントの視点を得ることであった。その成果を表1としてまとめたうえで、臨床心理学的コミュニティ支援への活用を図るための要点を整理する。

1. 生活基盤としてのコミュニティと目的志向のアソシエーションとの並存

古典的コミュニティ研究からの視点である。心理臨床家に関わるコミュニティの多くは、ここで言う「アソシエーション」である。たとえば病院や学校など、支援者の介入によってある程度改変可能な組織体として理解されている。しかし、私たちは生活基盤としての地域コミュニティに支えられ、かつ縛られる存在でもある。そして、コミュニティの衰退が論じられる昨今にあっても、これらが併存して生活者に影響を及ぼしていることを念頭に置く必要がある。

2. コミュニティにある“共通のもの”

“共通のもの”とはコミュニティの語源である。そこに含まれるものは、自然環境や社会制度、様々な「知識」等である。物質的なもの・精神的なもの、明示できるもの・暗黙のものがあ、かつ私たちは数多くのコミュニティに所属しながら生活を送っている。無自覚に埋め込まれた価値観などのように捉えがたいものも含めて、生活の推進力、及び行動を制限する不自由さの源泉がコミュニティにあることを認識したい。

表1. コミュニティ・アセスメントの視点

	コミュニティ・アセスメントの視点
(1)コミュニティとアソシエーション	・地域における生活基盤としてのコミュニティと、自主的かつ目的志向で形成されるアソシエーションの並存を的確に捉える
(2)コミュニティアリズム	・対象者及び支援者の行動の選択を規定する動因となっている、大小様々なコミュニティに存在する「共通のもの(≒共通善)」を捉える
(3)ネットワーク論と社会関係資本	・信頼を基盤とした対人ネットワークに着目することを通じて、コミュニティを量的に把握する ・ネットワークの自由度に差異を与える社会的影響をアセスメントする ・社会関係資本の結束型と橋渡し型の概念から、コミュニティ相互の関係性、及びコミュニティと個人の方向性の葛藤を捉える
(4)コミュニケーション・コミュニティ	・“公共圏”の概念から、「異議申し立て」のコミュニケーションを行う関係性をコミュニティとして捉える ・言語的コミュニケーションを行う“生活世界”に対する、貨幣や権力が統制する“システム”の影響をアセスメントする
(5)コムニタス	・社会を覆う「構造」の間に瞬間的に現れる「反構造」(=コムニタス)を見て、そこにおける純然たる関係性をコミュニティと捉える ・構造と反構造の場が転換するプロセスを捉える
(6)福祉コミュニティ論	・生活基盤としての「コミュニティ」と、支援対象者を中心とした「福祉コミュニティ」の二層を捉える ・予防的支援や共通の問題関心の醸成という視点から、それぞれのコミュニティに対する介入技法を検討する
(7)実践コミュニティ	・コミュニティ全成員の参加の正統性、及び共通の知識が生成されるダイナミズムの理解から、支援者と対象者が等しくこれに参加しているという視点を得る
(8)生活環境主義	・地域住民が社会的・政治的葛藤を通して構築した言説(言い分)を、文脈から切り離されて創造された“生活知”として捉える

3. 言語的コミュニケーションの外部に存在する“システム”

心理臨床家は、普段から依拠しているコミュニケーションが立ち行かない場面に遭遇することがある。たとえば貨幣や権力など、言語的コミュニケーションとは別の層の交換が明示されている。面接室は、言語的及び非言語的コミュニケーションが臨床心理学的に機能するように構造化された場であるが、コミュニティは“システム”の影響力が増す場であり、支援者はその力に翻弄されて機能が阻害される場合がある。その力に対してどのように応じるかは

今後の検討課題だが、心理臨床の限界と、外部に開かれて異分野と協働する必要性を認識する必要があるだろう。

4. コミュニティの生態と創造性

コミュニティも生き物であり、社会の中で生き延びていくために葛藤を抱えている。大きくは内部に閉じられる動きと外部に開かれる動きがあるが、その方向性や主張される言説はしばしば一貫性を欠き、捉えがたい。個人の不可解な心性を扱ってきた心理臨床学の理論的枠組みがコミュニティの理解に有効かは未知数だが、それと

格闘してきた社会学の知見は参照すべきであろう。これを踏まえて、コミュニティの動的側面と創造性に関与したい。

5. コミュニティ成員の対等性

コミュニティ心理学では、「共に生きよう。共に生きているのだ」(山本, 2000)という言葉に自明であるように、支援する者－支援される者という関係とは異なる対等な関係性を立脚点にしている。しかし、心理臨床学を基盤にした専門家は、むしろこの対等な関係性を通じた支援に戸惑いがちである。この飛躍を解消することは大きな課題だが、社会科学分野におけるコミュニティ研究の知見は新たな関わり方の示唆を与えてくれる。それは、コミュニティには「中央」はなく、そこに関わる者は等しくコミュニティの知の形成と創造性に寄与するという視点や、「反構造」として存在する純然たる関係性の指摘等である。それは、心理臨床の場で生じる根源的な交流を想起させるものでもある。

V おわりに

社会学的コミュニティ研究は、精緻な社会分析を通して、心理臨床家がコミュニティ支援に携わる際に踏まえるべき視点を提供してくれる。他方、心理臨床家は個人や集団に対するアセスメントと介入の技術をもっている。今後の課題は、これらの分析視点をさらに深めるとともに、コミュニティ支援の現場における実践的な活用方法を模索することである。本研究はそのための基礎資料を提示したものであり、今後はこれをもとに他職種との連携・協働を進めていく必要があるだろう。

付記

本稿は、「2020年度跡見学園女子大学特別研究助成費」によって行われたものである。また、本研究には開示すべきCOI状態はない。

文献

- 足立重和(2018)序章 生活主義再考—言い分論を手がかりに—。鳥越皓之・足立重和・金菱清編著 生活環境主義のコミュニティ分析—環境社会学のアプローチ—。ミネルヴァ書房, 1-22.
- 赤松尚樹(2011)都市は人間関係をどのように変えるのか—コミュニティ喪失論・存続論・変容論の対比から—。社会学評論, 62(2), 189-206.
- Buber, M., (1923) *Ich und Du*. Im Insel-Verlag zu Leipzig. 植田重雄訳(1979)我と汝・対話。岩波書店.
- Cohen, A., (1985) *The Symbolic Construction of Community*. London: Tavistock. 古瀬雄一訳(2005)コミュニティは創られる。八千代出版.
- Delanty, G., (2003) *Community*. Routledge. 山之内靖・伊藤茂訳(2006)コミュニティ—グローバル化と社会理論の変容。NHK出版.
- Fraser, N., (1992) Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy. Calhoun, C. (eds.), *Habermas and The Public Sphere*, MIT Press. 公共圏の再考—既存の民主主義の批判のために—。山本敬・新田滋訳(1999)ハーバマスと公共圏。未来社, 117-159.
- 藤澤三佳(2000)医療と臨床社会学のための

- パースペクティブ. 大村英昭編 臨床社会学を学ぶ人のために. 世界思想社, 47-70.
- 福島真人編(1995)身体の構築学—社会的学習過程としての身体技法—. ひつじ書房.
- Habermas, J., (1981) *Theorie der kommunikativen Handelns*, Band 2, Suhrkamp Verlag. 丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場孚瑳江・脇圭平訳(1987)コミュニケーション的行為の理論(下). 未來社.
- Hillery, G., (1955) Definitions of Community: Areas of Agreement. *Rural Sociology*, 20(2): 111-123.
- 平川毅彦(2008)二本立てのコミュニティ論と地域福祉—都市社会学と社会福祉学の狭間から—. 日本都市社会学会年報, **26**, 5-20.
- 平川毅彦(2016)「社会関係の主體的側面」を貫く「福祉コミュニティ」概念の再構成—岡村重夫『地域福祉論』(1974年)の批判的検討を通じて—. 新潟青陵学会誌, **8**(3), 1-10.
- 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹編(2017)コミュニティ事典. 春風社.
- 糸林誉史(2010)コミュニティとコミュニティアニズム. 文化女子大学紀要 人文・社会科学研究, **18**, 101-104.
- 河合隼雄(1989)生と死の接点. 岩波書店.
- 菊池理夫(2003)実践哲学としてのコミュニティアニズム—マッキンタイア, テイラー, ウォルツァー, サンデルの政治思想から—. 慶應義塾大学法学研究会, **76**(12), 183-219.
- 倉阪秀史(2008)コミュニティの基盤としての社会的共通資本—持続可能性という共通善の実現に向けて—. 公共研究, **5**(3), 7-37.
- Lave, J. & Wenger, E., (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press. 佐伯胖監訳(1993)状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—. 産業図書.
- Little, A., (2002) *The Politics of Community: Theory and Practice*. Edinburgh University Press. 福士正博訳(2010)コミュニティの政治学. 日本経済評論社.
- MacIver, R. M., (1917) *Community: A Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*. London: Macmillan. 中久郎・松本通晴訳(1975)コミュニティ—社会学的研究: 社会生活の性質と基本法則に関する一試論—. ミネルヴァ書房.
- 松田素二(1989)必然から便宜へ—生活環境主義の認識論—. 鳥越皓之編 環境問題の社会理論—生活環境主義の立場から—. 御茶の水書房, 93-132.
- 松本康(1995)現代都市の変容とコミュニティ, ネットワーク. 松本康編 増殖するネットワーク 21世紀の都市社会学. 勁草書房. 1-90.
- 松本康(2002)アーバニズムの構造化理論に向かつて—都市における社会的ネットワークの構造化—. 日本都市社会学会年報, **20**, 63-80.

- 松本康編(2014)都市社会学・入門. 有斐閣アルマ.
- 三隅一人(2013)社会関係資本—理論統合の挑戦—叢書・現代社会学⑥. ミネルヴァ書房.
- 中岡成文(2003)ハーバーマス—コミュニケーション行為—. 講談社.
- 野口裕二(2005)ナラティブの臨床社会学. 勁草書房.
- 岡村重夫(2009)地域福祉論 新装版. 光生館.
- 奥田道大(1993)都市型社会のコミュニティ. 勁草書房.
- 大村英昭編(2000)臨床社会学を学ぶ人のために. 世界思想社
- Putnam, R., (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon and Schuster. 柴内康文訳(2006)孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生—. 柏書房.
- 佐藤慶幸(2002a)NPOと市民社会—アソシエーション論の可能性—. 有斐閣.
- 佐藤慶幸(2002b)ボランティア・セクターと社会システムの変革. 中間集団が開く公共性(公共哲学7). 東京大学出版会. 193-229.
- 田嶋誠一(2009)現実に介入しつつ心に関わる—多面的援助アプローチと臨床の知恵—. 金剛出版.
- Tonnies, F., (1887) *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. 杉之原寿一訳(1975)ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粹社会学の基本概念—. 岩波書店.
- 鳥越皓之・嘉田由紀子編(1984)水と人の環境史—琵琶湖報告書—. 御茶の水書房
- Turner, V. W., (1969) *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. London: Routledge and Kegan Paul. 富倉光雄訳(2020)儀礼の過程. 筑摩書房.
- 宇野重規(2013)リベラル・コミュニタリアン論争再訪. 社会科学研究, **64**(2), 89-108.
- 宇沢弘文(2000)社会的共通資本. 岩波書店.
- Van Gennep, A., (1960) *The rite of passage*. London: Routledge and Kegan Paul. 綾部恒雄・綾部裕子訳(2012)通過儀礼. 岩波書店.
- Wellman, B., (1979) The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers. *American Journal of Sociology*, 84: 1201-31. 野沢慎司・立山徳子訳(2006)コミュニティ問題—イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク—. 野沢慎司編・監訳 リーディングス ネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本. 勁草書房. 159-200.
- Wenger, E., McDermott, R. & Snyder, W. M., (2002) *Cultivating Communities of Practice*. Boston: Harvard Business School Press. 野村恭彦監修・櫻井裕子訳(2002)コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践—. NTT出版.
- 山口昌男(1988)学校という舞台—いじめ・挫折からの脱出—. 講談社.
- 山本和郎(2000)危機介入とコンサルテーション. ミネルヴァ書房.